

# 第一章 鬚黒一族の物語 玉鬘と姫君たち

[第一段 鬚黒没後の玉鬘と子女たち]

これは(この話は)、\*源氏の御族にも離れたまへりし(源氏の御一族勢から離れなされた)、\*後の大殿わたりにありける\*悪御達の(後の太政大臣家となった藤原右家に仕えていた口の悪い女房たちの)、落ちとまり残れるが(生き残った者たちが)、問はず語り\*しおきたるは(勝手に喋っていた御家事情で)、\*紫のゆかりにも似ざめれど(今までの紫物語とは趣向が違うのだが)、\*「げんじのおおんぞう」は、この物語に於いては六条院筋であり、後を継いだ源殿は藤原左家と縁結びしている。光君の存命中は右家筆頭の左大臣は六条院の婿殿という立場でもあったが、光君没後は源殿とは元々の拠って立つ基盤が違うし、互いにそれぞれの勢力の主管でもあってみれば、この二人を調停出来る者など居らず、両者は実力で勢力拡大交渉を受領階級に働き掛け、政府内の地位もその勢力で克ち取るようになったのだろう。 \*「のちのおほと」は紅梅巻一章一段に「後の太政大臣(のちのおほきおとど)」と語られた藤原右家殿を言う、のだろう。 \*「わるごたち」はく口の悪い女房たち。>と大辞泉にある。実際に口が悪かったかどうか、ではなく、藤原右家を敵役に見立てる語り手の悪口口調だろう。 \*「しおきたるは」の「しおきたる」という連体名詞は文頭の「これは」を受けていて<仕置いた物だ>という概要説明になっている。だから客観的な分かり易さに努めるべき現代語文としては此処で句点を打って次の文に接続詞や代名詞を駆使して繋げるという書き方になるのが普通だ。が、この文では、そういう文の体裁よりは語りの語調や間合いに主導権があるらしい。で、この「しおきたる」という連体名詞はいとも容易に次の文の主語に兼用されて、対象規定の係助詞「は」で別の述語展開を導く。が、行儀の良い現代語文では此処で一旦話を区切って、話題展開の接続詞「で」で下文に続けることになる。 \*「紫のゆかり」は作者が藤壺から若紫に繋がる王家血筋を象徴的に言い表した語で、若紫巻三章三段に若紫を二条院にさらって来た光君が手習いの句として「ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露分けわぶる草のゆかりを」(和歌 5-24)と本音を吐露した場面に印象的に使われていた語でもある。当文が若紫巻と同一または単一作者の手になるものかどうかなどは私などに知る由も無いが、幻巻までの物語は「光る源氏君の物語」であると同時に、確かに「紫君の物語」であったようにも思える。が、此処で語られそうなく玉鬘=撫子の物語も帯木巻の「雨夜の品定め」から周到に種まきされていた題材で、当たり前だが、作者の当初からの主要な構成要素だったに違いない。というか、絶妙な実相だったか。

かの女どもの言ひけるは(その女房たちの言うことには)、「源氏の御末々に(源氏の御子孫に)、ひがことどもの混じりて聞こゆるは(不義不忠の不祥事が混じっていると申すのは)、我よりも年の数積もり(私たちより年配の)、ほけたりける人のひがことにや(呆けた人の間違いなんだろうか)」などあやしがりける(などと源氏血筋の正統性を不審がるのです)。\*いづれかはまことならむ(誰が本物の源氏の後継者なんでしょうか)。 \*「いづれかはまことならむ」は穏当に読めば、疑いは真実か錯誤かどちらなのでしょう、みたいな言い方に見える。しかし、その意味の穏当な言い方なら<いかなるや>とか<いかならむ>あたりになりそうで、「まことならむ」には<誰が本物なのか>という読者の興味を煽り立てる宣伝文句の響きを感じる。もしかすると、それがこの帖の主題かと、敢えてその意で言い換える。

\*尚侍の御腹に(玉鬘夫人腹に)、\*故殿の御子は(故藤原右家殿の御子は)、男三人、女二人なむおはしけるを(男三人と女二人がいらっしゃるが)、さまさまにかしづきたてむことを思しおきて(父殿は子供毎に養育方針をお立てになって)、年月の過ぐるも心もとながりたまひしほどに(早く成長するようにと心待ちにしていらっしゃった内に)、あへなく亡せたまひにしかば(敢え無く亡くなってしまったので)、夢のやうにて(夢のようで)、いつしかといそぎ思しし御宮仕へ

もおこたりぬ(興入れを楽しみにしていらした姫君の入内も立ち消えてしまいました)。\*「ないしのかみ」は冷泉帝の尚侍を仕えていた故藤原殿の実の娘で六条院の養女だった玉鬘姫のこと、らしい。この人を本文では何故に今も「尚侍」と呼称するのだろうか。それがこの人の運命をよく表わしているのだろうか。田舎育ちでも帝側近にまで昇ったことなのか、藤原家を嫌って田舎育ちとなったから女御に成れなかったことなのか、藤原殿の弱みを握ろうとヨコシマな深緑の気持で光君が近付いた夕顔だったが、その娘の撫子が藤原家左右勢力を結び付けて光君の最大の脅威になったという皮肉なのだろうか。その狙いが何辺に有るかも分からず、従って「尚侍」という呼称で其等や其以外の何かが表わされているとも思われず、私には「尚侍」は分かり難い呼称だ。私としてはこの人は<撫子>という認識が強いが、さすがにそれは子供としての印象なので、この人の今に至る人物像を客観的に特定出来て、あまり変な色付けにもならず且つ分かり易い呼称となると、与謝野訳文に倣って<玉鬘夫人>が妥当に思える。とはいえ是も、本文にそうした呼称語用は無いのだが、玉鬘巻四章八段に光君が撫子にめぐり合えた感慨を本音で吐露したであろう「恋ひわたる 身はそれなれど 玉かづら いかなる筋を 尋ね来つらむ」(和歌 22-12)という詠歌に基づくものなので、最善とは言えないまでも、本文で意図されたこの人の表象ではある。\*「故殿(ことの)」は藤原右家の左大臣らしいが、既に故人というのは驚きだ。紅梅巻で「後の太政大臣」と語られていて、その時には故人ということは示されていない。紅梅巻の話はこの人が存命中の、当巻の話よりもっと以前のことなんだろうか。しかし、それも全体の整合性に合わないような気もする。混乱する。こんな事で混乱したくないので非常に不快だ。また、この人は「鬚黒」と広く呼称されているようだが、この藤原右家殿はこの物語に於いて何も関羽よろしく美髯公としての活躍が描かれているワケでもなく、もう 26 年前の話だが行幸巻一章二段の冷泉帝の大原野の鷹狩り行幸への行列見物を玉鬘がした時の場面で、「右大将のさばかり重りかによしめくも、今日のよそひいとなまめきて、やなぐひなど負ひて、仕うまつりたまへり。『色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし。いかでかは、女のつくろひたてたる顔の色あひには似たらむ。』いとわりなきことを、若き御心地には、見おとしたまうてけり」と、右家殿の色黒で髯を蓄えた立派な武官姿も其と理解できない玉鬘の世間知らず振りが語られていたことに準拠した呼称で、特徴の一つと言えは然も有りなむだが、この行幸逸話は光君が玉鬘を尚侍として入内させようと目論んでいたハイライト・シーンとして語られていたもので、私はこの人の配役を作者は光君の最大の脅威性に企画していたと思うので、「鬚黒」はとてもこの人の主たる存在感を表わす呼び方ではなく、そればかりか武骨な無粋者という一面の強調や無精者みたいな誤解さえ与えかねない不適切な呼称に思えて、使用は憚られる。といて、本文に沿った分かり易い呼称は<真木柱の父君>くらいだが、これも一面に過ぎず、他に的確な呼称も見当たらないが、取り敢えず<故藤原右家殿>と呼んで置く。

人の心(世情の人心は)、時にのみよるわざなりければ(時勢にばかり寄り付くものなので)、さばかり勢ひいかめしくおはせし大臣の御名残(在職中は如何にも権勢を誇っていらした右家大臣の御逝去後は)、うちうちの御宝物(個人的な宝物類や)、領じたまふ所々のなど(荘園領地などは)、その方の衰へはなけれど(失わなかったが)、おほかたのありさま引き変へたるやうに(全体の様子はすっかり変わって)、殿のうちしめやかになりゆく(人の出入りが絶えて邸内は静まり返っていました)。

\*尚侍の君の\*御近きゆかり(玉鬘夫人の御兄弟たちは)、そこらこそは世に広がりたまへど(大勢が政府要人でいらっしやったが)、なかなかやむごとなき御仲らひの(なまじ貴家同士の御付き合いは)、もとよりも親しからざりしに(公人身分を前提とする社交儀礼上、個人的には元々親しいものではなかったが)、故殿(故右家殿は)、情けすこしおくれ(気配りが少し足りず)、むらむらしさ過ぎたまへりける御本性にて(個人的な好き嫌いで処遇を決め過ぎなさる御性分で)、心お

かれたまふこともありけるゆかりにや(怨みを買いなさる事もあつた所為か)、\*誰れにもえなつかしく聞こえ通ひたまはず(誰と言って親しく交際なさいませんでした)。\*「尚侍の君」は「かんのきみ」と読みがある。「尚侍」は「ないしのかみ」。「尚侍の君」は「ないしのかんのきみ」だろうし、そういう読みをする場合もあつた気もするが、言葉は意味が伝われば良いので、むしろ記号の象徴性が収れんされて、簡単な言葉で個別個人が特定できる方が他の事物との混同が避けられるので、簡素化は世の通例かと理解できる。ただ問題は、「尚侍」で「内侍司を掌握する長官」という意味が表現できるからなのか、是を「ないしのかみ」という職掌名に当てていることに無理があるような気がするが、それを私ごとが今さら如何こう出来るものでも無い。それでも、衛門督なら「督の君」で「かんのきみ」と読むのは分かり易いので、「尚の君」で「尚侍の君」が示される事にしても良さそうな気はする。が、それも今さらのことで、是は何れチョット気になったことに過ぎないが、こんな事ですらも、分かり難い文が続く、という印象が強まるほどだ。\*「御近きゆかり」は「御兄弟、御親戚」みたいな言い方で、実際には「藤原左家の腹違いの弟たち」のこらししい。\*「たれにも」について、特に故右家殿の事情を探る材料も無いが、この人は右家の宗家の惣領であり、その意味を自負もしていて、多分、右家筋の他者たちには尊大に振舞っていたのだろう。それでも有能な家司が右家にいれば、自勢力内の構成均衡を取り成す手配は付けていただろうが、個人の信望は本人でしか築けない。また、宗家同士の認識もあつてか、この人は故衛門督とは親しくしていたような気もするが、不幸にして左家惣領だつた衛門督も早世した。実は、源殿も花散里の世評観の影響も有つてか、若い時はこの右家殿を好感というか尊敬していたように私は読んできたが、光君亡き後の立場上の確執は個人的に処理し切れるものではない。ただ、右家殿亡き後の今となつては逆に、公的立場での敵対関係が終わつて玉鬘と源殿は親しくし易くなった、という事情はあるのかも知れない。

六条院には(六条院光君に於かれては)、すべて(玉鬘腹の御子たち全員を)、なほ\*昔に変わらず数まへきこえたまひて(右家に嫁いだ娘の子とは言え、生前はずっと同じ源氏家の孫とお考えになつていらして)、亡せたまひなむ後のことども書きおきたまへる御処分の文どもにも(御遺言に託しなされた御遺贈分の書面にも、その養育に困らないようにと)、中宮の御次に加へたてまつりたまへれば(明石中宮に次ぐ割り当てを書き残していらつしやつたので)、右の大殿などは(源右大臣殿は)、なかなかその心ありて(その御遺志を尊重する気持から)、さるべき折々訪れきこえたまふ(玉鬘の子供たちの成人式などにお祝いの御見舞を申し上げなさいます)。\*「むかし」とは何を指すのか。光君の存命中に右家殿が亡くなつたのなら、この「むかし」は「右家殿の存命中」とも思えるが、明示が無く分からないので、分かる範囲で文意を取れば、この「むかし」は玉鬘が「六条院に居た時＝結婚前」と読める。玉鬘には六条院以前の立場もあるが、其は文意に合致しない事情かと思う。尤も、夕顔の死去後に撫子を探させた所まで遡る、という見方も、心情では成立するのかも知れないが、其は実情とは言えない。

## [第二段 玉鬘の姫君たちへの縁談]

男君たちは(玉鬘の男御子たちは)、御元服などして(元服を済ませて)、おのおのおとなびたまひにしかば(各自成人し任官なさつていたので)、殿のおはせでのち(父殿が亡くなつた後で)、心もとなくあはれなることもあれど(頼みを失つて情けない目に遭う事もあつたが)、おのづからなり出でたまひぬべかめり(自分の才覚で出世なさつて行けそうでした)。

「姫君たちをいかにもてなしたてまつらむ(姫君たちをどのように嫁がせ申したのか)」と、思し乱る(と玉鬘は思い悩みなさいます)。

内裏にも(帝に於かれても)、かならず宮仕への本意深きよしを、大臣の奏しおきたまひければ(娘が必ず入内する心算でいると父大臣が奏上なさっていたので)、おとなびたまひぬらむ年月を推し量らせたまひて(年頃になった頃合いを見計りあそばして)、仰せ言絶えずあれど(帝の御催促が絶えずあったが)、

中宮の(源氏の中宮が)、いよいよ並びなくのみなりまさりたまふ御けはひにおされて(いよいよ並ぶ者無い御威勢でいらっしゃるのに圧倒されて)、皆人無徳にものしたまふめる末に参りて(他の妃は皆恵まれなくていらっしゃるその末席に参内して)、遙かに目を側められたてまつらむもわづらはしく(遠目で見下され申し上げるのも心外で)、また人に劣り(また他の妃の下位に甘んじて)、数ならぬさまにて見む(娘の誇りの無い入内姿を見るといいうのも)、はた、心尽くしなるべきを思ほしたゆたふ(それは心労になりそうだとお思いになってためらいます)。

冷泉院よりは(冷泉院からは姫君の参内を)、いとねむごろに思しのたまはせて(とても熱心に御所望あそばして)、\*尚侍の君の、昔(玉鬘が尚侍だった時の昔に)、本意なくて過ぐしたまうし辛さをさへ(帝妃として仕えず、残念な結果になってしまった苦い思い出をさえ)、とり返し恨みきこえたまうて(持ち出して恨み言を申しなさって)、\*「かんのきみ」という呼称が此処で初めて生きるように見える。注にも<玉鬘が尚侍として冷泉院の在位中に出仕したにもかかわらず鬚黒の北の方となってしまうことをさす。>とあるが、玉鬘を「尚侍の君」と呼称することに、作者がいつも冷泉院との関係を意識していたとまでは考え難いような気もする。

「今は、まいてさだ過ぎ(今は当時に増して年を取り)、すさまじきありさまに思ひ捨てたまふとも(全く不釣合いな結婚相手だとお見限りなさるとしても)、うしろやすき親になずらへて(面倒見の良い親に預ける心算で)、譲りたまへ(姫をお譲り下さい)」

と、いとまめやかに聞こえたまひければ(とたいそう本気で申し入れなさっている)、  
「いかがはあるべきことならむ(どうすれば良いのだろう)。みづからのいと口惜しき宿世にて(私自身は帝妃に成れないという非常に残念な宿命だったので)、思ひの外に心づきなしと思されにしが(私を尚侍にお迎え下さったのを、意外にも当てが外れたとお思いになったのが)、恥づかしうかたじけなきを(気が引けて畏れ多いのを)、この世の末にや御覧じ直されまし(この晩年に娘の参内に拠ってご機嫌を直して頂けるのかもしれない)」など定めかねたまふ(などと玉鬘は娘の嫁ぎ先を定めかねていらっしゃいました)。

[第三段 夕霧の息子蔵人少将の求婚]

容貌いとようおはする聞こえありて(姫君は美人だという評判があつて)、心かけ申したまふ人多かり(興味を覚えて縁談を申し込む人は多くいました)。右の大殿の\*蔵人少将とかいひしは(源右大臣の子息の蔵人少将とかいう者は)、三条殿の御腹にて(三条殿正妻腹の御子で)、\*兄君たちよりも引き越し(妾腹別腹の兄君たちを追い越して出世し)、いみじうかしづきたまひ(両親がとても大事になさり)、人柄もいとをかしかりし君(自身もとても有能な青年が)、いとねむごろに申したまふ(とても熱心に申し込みなさいます)。\*「くらうどのせうしゃう」は官位相当では正五位下の身分らしいが、むしろ頭中將に次ぐ蔵人所の次席を示した言い方、のようだ。蔵人所は天皇の側用人詰め所だか

ら、実際には権威体現者集団であり、その下位の者は小間使いであっても、上位者は当然に主要な貴族だ。というより、時の権威者家系がその地位を襲うことになる、ようだ。この人物が右大臣家の次期主席者らしい。\*「せうとぎみたち」は妾腹別腹の年長兄弟なのだろう。妾とは舞姫から典侍となった惟光女であり、三条殿との結婚が藤原殿から長い間許されずにいた時に、源殿は他の女を正妻に据えることはなかったが、女遊びを控えていたわけではなく、その多くが召人やその場限りまたは短期の遊び相手だったようだが、この惟光女だけは正妻にするには配下女だったものの、情深く処遇したらしい。源殿が二歳年上の藤原三条姫の御預けを食らったのは、二人の相思相愛が藤原殿に知られた源殿 12 歳の秋(少女巻五章)から 18 歳の初夏(藤裏葉巻一章)までの六年間弱。傷心の源殿 13 歳の春に舞姫の惟光女を見初めて、この女も弟が源殿と同じ年らしいので少し年上のようなのだが、手下筋の惟光が仲を邪魔立てするべくもなかったのだろうし、女自身も分を弁えてそのまま内妻の地位にも甘んじたようだ。とはいえ、この二人の生活や家族の描写は皆無で、子供たちを何時何人設けているのかなどの具体的な事情は不明だ。ただ、源殿はこの年で 41 歳かと思われ、藤原三条姫との結婚が 23 年前のことなので、この蔵人少将が 23 歳だとすれば、典侍腹の兄は 25~28 歳くらいの可能性が高いとは見做せそうだ。

\*いづ方につけても(正妻腹にせよ妾腹にせよ、いずれにしても右大臣の子息は)、もて離れたまはぬ御仲らひなれば(玉鬘の息子たちとは疎遠ではいらっしやらない睦まじさなので)、\*この君たちの睦み参りたまひなどは(彼らが玉鬘邸に親しく立ち寄り申しなさる際には)、気遠くもてなしたまはず(気構えなさることはありません)。\*「いづ方につけても」の文意は、注に<玉鬘の姫君と夕霧の子の蔵人少将は、玉鬘と夕霧は義理の姉弟、また玉鬘と雲居雁は異腹の姉妹の関係である。>とある。ただし、この解釈には疑義がある。私見は次のノート項目に記す。\*「この君たち」は<右大臣家の子息たち>だろうが、だとすると、「兄君たち」も含まれることになるし、その「兄君たち」も「もて離れたまはぬ御仲らひ」なら、「兄君たち」は蔵人少将と<同腹正妻腹の兄弟>なのかもしれない。しかし、同腹正妻腹の兄が弟より出世が遅れる、というのは他家に養子に出されたという事情か、特に失態でもない限りは有り得ない。そして、その場合には「この君たち」に含まれない。何か見落としているのだろうか。混乱する。で、私見だが、上の「いづ方につけても」の文意を次のように仮定してみたい。即ち、「いづ方」は正妻腹と妾腹の<どちらかという違い>という意味だ、と。というのも、ひとつには先ず、玉鬘は三条殿に血縁はあるが特に懇意なのではない。そして次に、若菜下巻十二章一段の朱雀院五十賀の為の六条院での試楽の場面で<右の大殿の四郎君、大将殿の三郎君、兵部卿宮の孫王の君たち二人は、「万歳楽」。まだいと小さきほどにて、いとらうたげなり。四人ながら、いづれとなく高き家の子にて、容貌をかしげにかしづき出でたる、思ひなしも、やむごとなし。また、大将の典侍腹の二郎君、式部卿宮の兵衛督といひし、今は源中納言の御子、「皇じやう」。右の大殿の三郎君、「陵王」。大将殿の太郎、「落蹲」。さては「太平楽」、「喜春楽」などいふ舞どもをなむ、同じ御仲らひの君たち、大人たちなど舞ひける。>と賑々しく語られていて、六条院に於いては源殿の子息たちと玉鬘の子供たちを光君は同じ孫たちとして慈しんでいたように描かれており、更に源殿の子息たちを正妻腹と妾腹の別無く可愛がっていた、かの印象を受ける。そして玉鬘はその光君の姿勢に倣った、のではないか。なお、「もて離れたまはぬ御仲らひ」は右大臣家の男子と玉鬘家の男子が<幼馴染>だということを言っている、のだろう。

女房にも気近く馴れ寄りつつ(女房にも気安く近寄って)、思ふことを語らふにも便りありて(姫君へ取り次ぐ懸想文を頼んで)、夜昼(夜も昼も)、あたりさらぬ耳かしかましさを(入り浸って近くを離れない喧しさを)、うるさきものの(煩わしいながらも)、\*心苦しきに(右家筋の寄り付きが無い中で左家筋から好感を寄せられることに、有難いとも)、\*尚侍の殿も思したり(屋敷の主人の玉鬘未亡人もお思いになりました)。\*「心苦し」は<気まずい、気が引ける>。落ち目の家に有

難い、みたいに読んで置く。 \*「かんのとの」は注に<玉鬘。尚侍の殿という呼称。>とある。「殿」は<立派な建物>であり、其処の<主人>も意味する、のだろう。

\*母北の方の御文も(中でも蔵人少将は母の三条殿の口添えの御手紙も)、しばしばたてまつりたまひて(何度も玉鬘に差し上げなさって)、「いと軽びたるほどにはべるめれど(俸はまだ低い地位ではございますが)、思し許す方もや(お考え頂けませんか)」となむ(どのように)、大臣も聞こえたまひける(父の右大臣も義姉に口添えなさいます)。 \*「ははきたのかた」は注に<蔵人少将の母雲居雁。>とある。「北の方」は<正妻たる奥方>だから<三条殿>に違いない。となると、「この君たち」はやはり正妻腹の兄弟を指すのだろうか。いや多分、此处で「母」と言うことで、話題は、または主語は、「この君たち」から「蔵人少将」その人に移った、と読ませる書き方に思える。この物語の語りでは、接続詞や代名詞が極端に未発達に思えて、こんな感じの語りは以前にも何度かあったような気がするし、そう読むと、全体の文意が分かり易い。で、左様補語する。ただ、此处の語りからは、今までにはこの物語に登場の無かったような、子離れしない右大臣夫婦の親御ぶり、または親離れしない少将の子供ぶり、みたいな印象があって興味深い。で、気になるのは蔵人少将の年齢だ。23歳以下なのは確かだが、もっとずっと若くて10代半ばなのかも知れない。混乱する。

\*姫君をば(玉鬘殿は長女の姫君については)、さらにただのさまにも思しておきてたまはず(入内を念頭に、全く臣下身分に嫁がせる気はお持ちではなく)、中の君をなむ(次女の姫君なら)、今すこし\*世の聞こえ軽々しからぬほどにならずらひならば(少将がもう少し地位や身分が高くなったら)、さもや(嫁がせても良いか)、と思しける(とお思いなのでした)。 \*「ひめぎみをば」は注に<「姫君」は大君。臣下との結婚、すなわち蔵人少将との結婚は考えていない。>とある。上文で話題が少将に絞られたという文脈で語られている話、と読む他は無い。 \*「世の聞こえ軽々しからぬほどにならずらひならば」は注に<主語は蔵人少将。>とある。「母北の方の御文も」以降は一連文のようだ。それにしても、こういう主語省略は本当に紛らわしいし、分かり難い。語りなら、別の説得力も有るのかも知れないが、それは聞き手の生活感の共有が前提なのだろう。そんなものは私には全く無い。

許したまはずは(玉鬘殿が結婚をお許しなさらなければ)、盗みも取りつべく(姫君を盗み取ってしまいそうに)、むくつけきまで\*思へり(少将は一途に思い詰めている、ようなのです)。 \*「思へり」は動詞「思ふ」の已然形に客観叙述の助動詞「り」が付いて、その終止形で文末を示している。「思ふ」の主語は少将だが、「り」は状態説明の客観叙述を示すので、この文は語り手による状況説明の地文のような外形だが、前後の文脈からして、是は玉鬘の認識を語り手目線で描いた言い方のように見受けられる。

\*こよなきこととは思さねど(玉鬘殿は少将との縁談をこの上なく悪いものとはお考えではなかったが)、女方の心許したまはぬことの紛れあるは(女の方の親がお許し無い内での間違いが有っては)、音聞きもあはつけきわざなれば(軽々しい噂も立つ事なので)、聞こえつぐ\*人をも(姫と少将との仲を取り持つ女房にも)、「\*あな、かしこ。過ち引き出づな(くれぐれも間違いの無いように)」などのたまふに(などと仰るので)、\*朽たされてなむ(その取次女房は重荷を背負わされて気落ちして)、わづらはしがりける(困っていました)。 \*「こよなし」は<この上なく、非常に>だが、良い場合にも悪い場合にも使う、と古語辞典にある。此处では後者で、対象語は<少将との縁談>だろう。 \*「人」は特定の女房の筈だが具体的な説明は無い。 \*「あなかしこ」の原義は<何と畏れ多い>で、取り返しの付かないことだから<くれぐれも注意するように>という定句のようなものだろう。手紙の結びでは、勝手な言い分

畏れ多くく失礼申しました>みたいな定句。 \*「くたす」は<気持を萎えさせる>だろうが、此処では上文に「過ち引き出づな」と<注意を受けた具体例>が既にあるので、その意味合いを言い換えて置く。

#### [第四段 薫君、玉鬘邸に出入りす]

六条院の御末に(六条院の御晩年に)、朱雀院の宮の御腹に生まれたまへりし君(朱雀院の姫宮腹にお生まれになった男子は)、冷泉院に(冷泉院に於かれて)、御子のやうに思しかしづく\*四位侍従(御子のやうに思って御世話なさる四位の侍従で)、そのころ十四、五ばかりにて(その年齢は十四、五歳ほどで)、いとくびはに幼かるべきほどよりは(如何にも年相応の未熟さと言うよりは)、心おきておとなおとなしく(気構えのある態度が大人びて)、めやすく(卒が無く)、人にまさりたる生ひ先しるくものしたまふを(人の上に立つ将来性がはっきりしていらっしゃるので)、\*尚侍の君は(玉鬘殿は)、婿にても見まほしく思したり(この義理の弟君を次女の婿に迎えたいともお思いなのでした)。 \*「しみのじじゅう」については、注に<『完訳』は「十四歳の二月に侍従、秋、右近中将に昇進(匂宮卷)。侍従は従五位下。官位相当より上の位の者は、位を示して呼ぶ」と注す。>とある。冷泉院の肝いりで特別加階されたと匂宮卷二章一段にあった。また、当文は「六条院の御末に」も「朱雀院の宮の御腹に」も客観性のある分かり易い言い回しで、何だ、やれば出来るんじゃない、みたいな上から目線にも立ちたい気になるが、これは正に薫君がそういう公的な立場にある家柄の御子であることと、匂宮卷で既述された内容をなぞっているからこそ、分かり易さなのかも知れない。ただ、匂宮卷ではこの君の薫る体質を、匂宮との比較もあってか、その特徴に上げていたが、此処では今のところその話題は無い。当面は、この君を<侍従君>として置くべきだろうか。ともあれ、それにしても、此処まで簡潔な説明の仕方は珍しい。 \*「尚侍の君」と此処で呼称する意図は何か。姫を管理する殿の立場を示すなら「尚侍の殿」の方が相応しい気がする。それとも、此処では玉鬘と薫君との続柄関係を注意喚起しているのだろうか。表向きの続柄なら、玉鬘と薫君は義理の姉弟だ。が、実質の血縁では実の伯母と甥の間柄なのだが、両者または一方でもその関係性を知っているのか、意識しているのか、などは今のところ不明であり、其処までの興味を読者に持たせる意図がこの段階でどれほど作者にあるのかも不明だ。要するに私には「尚侍の君」と呼称する意味が分からず、私は文意の分かり易さを取って<玉鬘殿>として置く。

この殿は(この玉鬘邸は)、かの三条の宮といと近きほどなれば(侍従君の母上の三条の入道宮邸ととても近い所だったので)、さるべき折々の遊び所には(時候の催事の時の後宴などには)、君達に引かれて見えたまふ時々あり(玉鬘の子息たちに誘われて侍従君が御見えになる事は時々ありました)。

心にくき女のおはする所なれば(妙齡の女がいらっしゃる家なので)、若き男の心づかひせぬなう(若い男でそれを気にしない者は無く)、\*見えしらひさまよふ中に(装束を飾り立て合って出入りする中に)、容貌のよさは(顔立ちの良さでは)、この立ち去らぬ蔵人少将(この熱心な蔵人少将)、なつかしく心恥づかしげに(優しさと気品があつて)、なまめいたる方は(風情ある点では)、この四位侍従の御ありさまに(この侍従君の御姿に)、似る人ぞなかりける(匹敵する人はいませんでした)。 \*「見えしらふ」は<見映えを競い合う→衣装を競う>。「さまよふ」は<当ても無くうろつく→用も無く出入りする>。

六条院の御けはひ近うと思ひなすが(源氏の末子だから、六条院光君の御風格に近いと思ひ做して)、心ことなるにやあらむ(特別視される所為か)、世の中におのづからもてかしづかれたま

へる人(侍従君は宮中で自然に大事にされなさる人で)、若き人びと(若い女房たちは)、心ことにめであへり(特に好男子だと噂を立てていました)。

尚侍の殿も(玉鬘殿も)、「げにこそ(確かに)、めやすけれ(婿に相応しい)」などのたまひて(などと仰って)、なつかしうもの聞こえたまひなどす(親しくお話し申したりなさいます)。

「院の御心ばへを思ひ出できこえて(六条院の御人柄を思い出し申して)、慰む世なう(亡くなったのが残念で)、いみじうのみ思ほゆるを(悲しいとばかり思えますのを)、その御形見にも(その面影を)、誰れをかは見たてまつらむ(あなたの他には誰にも見出せません)。右の大臣は、ことごとしき御ほどにて(源氏の右大臣は重役でいらっしゃるので)、ついでなき対面もかたきを(特別な機会でも無いとお会いできませんので)」

などのたまひて(などと仰って)、兄弟のつらに思ひきこえたまへれば(侍従君と右大臣を兄弟の列に並べて思うように申しなさると)、かの君も(侍従君の方も)、さるべき所に思ひて参りたまふ(玉鬘邸を姉の家と思ってお訪ね申し上げなさいます)。

世の常のすきずきしさも見えず(侍従君は若い男に有り勝ちな女に入れ込む様子も見えず)、いといたうしづまりたるをぞ(それはとても落ち着いているのを)、\*ここかしこの若き人ども(あちらこちらの若い女たちは)、口惜しうさうざうしきことに思ひて(悔しく惜しいことに思って)、\*言ひなやましける(自分から侍従君に言い寄って困らせていたんです)。 \*「ここかしこの若き人ども」は注にく三条宮邸や玉鬘邸の若い女房たち。>とある。が、与謝野訳文にはく二人の姫君付きの女房>とある。この文は、「世の常の」をく玉鬘邸を訪れる男たち皆>と読むのか、より一般的にく世の若い男たち皆>と読むのか、だが、「玉鬘邸を訪れる男たち皆」については、直ぐ上に「心にくき女のおはする所なれば、若き男の心づかひせぬなう、見えしらひさまよふ」と語られているので、此処ではく「世の常」=男一般>の語用で、その男一般とは違う侍従君こと薫君の高い世評と取って置きたい。同様の語りは匂宮巻二章五段により詳しい事情があったが、匂宮巻の「さもあるまじき際の人びとの、はかなき契りに頼みをかけたる多かり」という切実さとは少し趣旨が違って、此処では侍従君がとにかく持てるという面を強調しているようだ。 \*「言ふ」は「申す」や「聞こゆ」などの社会的立場を踏まえた言い方ではなく、思う事を口にする、という意味らしい。主語は「若き人ども」だから相手は侍従君なのだろう。「なやます」も他動詞でく自分が悩む>のではなくく相手を困らせる>ということらしく、女の方から侍従君に言い寄って困らせる、ということのようだ。だとするとく悩まし奉る>みたいな敬語遣いが無いのが妙だが、この文は「すきずきしさも見えず」と最初から「見え給はず」との敬語が無く、蓮っ葉な悪御達の噂話を演出している、と取って置く。それにしても、「若き人ども」は匂宮巻二章五段で語られていた三条宮に参集していた女たちのことだろうが、「言ひなやましける」は非難がましい口調に聞こえて、匂宮巻で語られていた事情とは少し違う印象だ。匂宮巻二章五段には、「はかなくなげの言葉を散らしたまふあたりも、こよなくも離るる心なく、なびきやすなるほどに、おのづからなほざりの通ひ所もあまたになるを、人のために、ことごとしくなどもてなさず、いとよく紛らはし、そこはかとなく情けなからぬほどの、なかなか心やましきを、思ひ寄れる人は、誘はれつつ、三条の宮に参り集まるはあまたあり」と薫君側の事情が語られていて、むしろ女たちは召し人の立場に甘んじていた、という言い方になっていた。尤も、女たちは当然に薫君に厚遇をせがんだだろうが、匂宮巻二章五段の続きには「つれなきを見るも、苦しげなるわざなめれど、絶えなむよりは、心細きに思ひわびて、さもあるまじき際の人びとの、はかなき契りに頼みをかけたる多かり」とあって、正妻の地位は諦めて情人生活を受け入れていた、と読めるので、是は作者がしたたかに、立場によって見方が変わるという噂話の一面を描いたもの、にも見えるが、深読みすれば、別の作者が匂宮巻二章五



段の記事を基にして別視点を設定して加筆した、という解釈も出来るのかも知れない。私はその辺の真偽に特別に関心を寄せてはいないが、本編に比してこの後日談は光君という主軸を欠いて、より時代の群像が語られる焦点の甘さとか大きさがあって、余談の入り込む余地が広く、各話に構成上の位置を意識しがちだ。なぜなら、当時の現代劇を後世の読者が読むには、基本的な背景認識が足りないので、状況確認しながら読まないで、語りを味わうどころか文意が取れない、もしくは読み違えるということになり、それはそれで面白がるという手もあるが、正誤が分からなければ面白がることも出来ない。恐らく、本編が光君の死を以て終了した時に、作者は少なからず虚脱感を覚えた、というか、書き終えたと思った筈だ。作者の最当初の執筆動機は、今の言葉でいう所の、王朝価値の時代性という強烈な主題意識、に在ったと思われ、この後日談は主眼ではなかった、のだろう。しかし同時に、作者の主眼目は教条垂れでもなく、王朝宮廷の面白い話をその和歌の文化性の中で語り継ぐ事自体にあったことも確からしく、その意図からすれば、光君の死を以て一卷の構想は収まったものの、面白い実話の虚構化には事欠かない実相が続いていて、語り部に余力のある限りに於いて、物語が続いたような印象だ。で、後日談がそういう趣旨となると、言ってみれば面白ければ何でも有り、という散漫さが物語に許容されて、それ自体が王宮の宮美であるかの執筆姿勢になることを思えば、後日談の全体構想の緩さも自明の事のような気もしてくる。